

## あんなふうに踊りたい—身体のことば—

西川 勝（大阪大学

コミュニケーションデザイン・センター）

---

草を食んでいる野生の子鹿がいる。風の向きが変わった瞬間、子鹿の頭が起きて周囲を探るように両耳を動かす。ピクッと耳の動きが止まった途端、子鹿はさっと跳ねて、その場から逃れていく。こんな光景を思い出させる女性がいた。彼女は認知症を抱えて特別養護老人ホームに住んでいる。少し前屈みになって歩く姿は頼りなげだが、なにかの拍子に子鹿のような俊敏さを見せる。介護者に付き添われて歩いているかと思うと、突然、別方向へ小走りになって進んでいくのだ。呼び止めても彼女には届かない。彼女の話すことばも、周囲の人との情報交換には役立たない。低くかすれるような小声でつぶやき、返事を待つように相手の目をじっと見つめる。そんな彼女とデュオを踊るダンサーがいる。ダンサーの名は砂連尾理（じゃれお・おさむ）。認知症と呼ばれる老人とのコミュニケーションに関して、ぼくが多くを教えられている男性だ。

2010年3月に公開された「とつとつダンス」が彼との出会いの始めだった。砂連尾さんが舞鶴の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」の入居者と共に創りあげたダンス作品に驚愕に近い感銘を受け、それから砂連尾さんと舞鶴に通い続けている。

砂連尾ダンスの魅力と秘密を一言で明らかにするのは不可能だが、印象的なダンスワークのなかで思いついたことばがある。「気配を消しつつ相手に重なっていく」という姿だ。これが子鹿のように繊細で予測できない行動をとる人と美しく踊ることを可能にしている。

先日は、若い頃からの難病で車椅子生活になった女性と砂連尾さんの即興ダンスを観た。彼女に認知症はないが、歩くことはできず右手も動かない不自由な身体である。彼女は左手で電動車椅子を微細に操作する。この彼女と砂連尾さんが、畳一枚ほどの場所から離れずに1時間近くを踊り続けた。二人のあいだには、これ以上ゆっくりと動くのは無理だと思えるほどの姿勢の変化だけしか見られない。それだけでも非日常のダンスなのだが、女性が左手で右腕を持ち上げはじめて、その萎えた右手に砂連尾さんのからだに触れた瞬間、ダンスを観ていた者は息を呑むしかなかった。

ダンスの後、ふだんは口数の少ない彼女が「50年ぶりですよ。私の右手が誰かにつながったのは・・・」と瞳を輝かせた。静かな感動は、いまもぼくの胸を震わせている。

---